

カキツバタ一家言

牧野富太郎

青空文庫

花がつまじりにさけるかきつばたたれしめさして衣にするらん

公実

狩人の衣するてふかきつばた花さくときになりぞしにけり

基俊

カキツバタはだれもよく知っているアヤメ科イリス (*Iris*) 属の一種であつて、*Iris laevis* *gata Fisch.* の学名を有する。シベリア、北支那方面からわが日本に分布せる宿根草で、水辺あるいは湿原に野生し、わが邦では無論かく自生もあれど、通常は多くこれを池畔に栽えてある。

この草は冬はその葉が枯れて春に旧根から萌出し、夏秋に繁茂する。根茎は横臥し分枝し、葉は跨状式をなして出で、剣状広線形で尖り鮮綠色を呈して平滑である。葉中に緑茎を抽いて直立し一、二葉を互生し、茎頂に二鞘苞ありて苞中に三花を有し、毎日一花ずつ開く。花は美麗な紫色で外側の大きな三片は萼で、それが花弁状を呈し、その間に上に立つている狭い三片が真正の花弁である。萼片の柄の内側に一つの雄蕊おしべがあるから、つまり雄蕊は一花に三つあるわけだ。そしてその葯は白色で外方に向かつて開裂し花粉を吐くのである。中央に一花柱があつて三つに分れ、その枝は萼片の上により添うて葯を覆い、そ

の末端に二裂片があつてその外方基部のところに柱頭がある。この花は虫媒花であるから昆虫によつて媒助せられ、雄花の花粉を虫が柱頭へ付けてくれる。そして子房は花の下にあつていわゆる下位子房をなし、花後に果実となりついにそれが開裂して種子を放出し、枯れた実は依然として立つている。カキツバタは紫花品がふつうであるが、またシロカキツバタという白花品もあれば、またワシノオと呼ぶ白地へ紫の斑入り品もある。そして本種は同属中で最もゆかしい優雅な風情を持つていて、その点はまったく同属中他品のおよぶところではない。さればこそ昔から歌や俳句などで決してこれを見逃していないのは、尤もな^{もつと}ことだと思われる。

今カキツバタの語原をたずねてみると、これはその根元は「書き付け花」から来たものだといわれる。すなわちそれは国学者荒木田久老の説破するところで、この同氏の説はまったく信憑するに足るものと信ずる、よつて今左に同氏の説を紹介するが、これは今からまさに百二十一年前の文政四年に出版となつた同氏著の、『槻の落葉信濃漫録』に載つている文章である。

かきつばた

波太波奈ハタハナの通ふ言につきて因に言 かきつばたといふ花の名は燕カケの翅カケリツバハナの形ちに似たれば
 翅カケリツバハナ燕花 といふ言ぞと荷田大人のいはれしよし 師の冠辞考に見えたるをめでたき考
 とおもひをりしに 按オモヘば是は燕子花とある漢字よりおもひよせられしものなり 熟考ツラツラ
 に万葉七に墨吉スミノエノアサハラヌノカキツバタキヌニスリツケキムヒシラスモ之浅沢小野乃加吉都播多衣爾須里着将衣日不知毛又同卷に かきつばた
 衣に摺つけますらをの服キソヒカリ曾比獵する月は来にけりとありて 上古は今のごとく染汁を製
 りて衣服を染ることはなくて 榛ハリの実或はすみれかきつばたなどの色よき物を衣キヌに摺り
 着ツケてあやをなせるなり 其摺スリツクル着ツケをまたかきつくともいひて是も卷七に 真鳥住卯マトリスムウナ
 手テの神社モリの菅スガの実ミを衣キヌに 書付令服兒欲得カキツケキセムコモガモとあれば かきつばたは書付花也カキツバナ（はな
 とはたと通ふは上にいふがごとし） 着ツケをつとのみいふも古語也 つきつくつけなどい
 ふきもくもけも用言に添る言にて元來つの一ツキ言ツキぞ着ツキの意なりける 船のつく所を津とい
 ふにて知るべし（以下省略）

右にてカキツバタの語原はよく解るであらう。

昭和八年六月四日に、私は広島文理科大学植物学教室の職員達と一緒に同校の学生を引

き連れて植物実地指導のため、安芸の国山県郡八幡村におもむいた。この八幡村は同国西北隅の地でその西北は石見の国と界している。そしてこの村の田間の広い面積の地にカキツバタが一面に野生し、それがちょうど花のまつさかりな絶好の時期に出会った。私はつらつらそれを眺めているうちに、わが邦上古にその花を衣にすったということを思い浮かべたので、そこでさっそくにその花はなびら葩を摘み採り、試みに白のハンケチにすりつけてみたところ少しも濃淡なく一様に藤色に染んだので、さらに興に乗じて着ていた白ワイシャツの胸の辺へもしきりと花をすり付けて染め、しみみと昔の気分浸って喜んでみた。私は今この花を見捨てて去るのがものうく、その花辺に低徊しつづけるうちにはしなく次の句が浮かんだ。この道にはまったく素人の私だから、無論モノにはなっていないのが当り前だが、ただ当時の記念としてここにその即吟を書き残してみた。

衣に摺りし昔の里かかきつばた

ハンケチに摺って見せけりかきつばた

白シャツに摺り付けて見るかきつばた

この里に業平来れば此処も歌

見劣りのしぬる光琳屏風かな

見るほどに何となつかしかきつばた

去ぬは憂し散るを見果てむかきつばた

なんとつたない幼稚な句ではないか。書いたことは書いたが背中に冷汗がにじんできた。今から千余年も遠い昔にできた深江輔仁の『本草和名』には、加岐都波太、すなわちカキツバタを蠹実、一名劇草、一名馬藺子等と書き、次いで千年余りも前にできた源順の

『倭名類聚鈔』にもまた、加木豆波太、すなわちカキツバタを劇草、一名馬藺と記し、次いでまた九百余年前に撰ばれた『本草類編』にも、加岐都波奈を蠹実と書いてあるのはいずれもみなその漢名の適用を誤っていて、これらはことごとく同属ネジアヤメの名である。カキツバタを加木豆波太、加岐都波太、加吉都幡多、華己紫抜他、もしくは加岐都波奈と書くのは単にその和名を漢字で書いたもので、すなわちいわゆる万葉仮名である。またさらに同じく漢字をもつて書いたものに、垣津幡、垣津旗、垣幡がある。またカキツバタの別名としてカイツバタ、貌^{カオヨグサ}吉草、カオヨバナ、カオ花、貌^{カオバナ}花、容^{カオバナ}花、可保婆奈^{カオバナ}、可保我波奈^{カオガハナ}があるが、これらは主として古歌に用いられたもので、今日ではただカキツバ

タの一通名で一般にとおつていてあえて他の名では呼ばなく、ただときとすると略して、カキツと呼んでいることがあるにすぎない。

支那の植物に杜若^{トジャク}という草があつて、わが邦の学者は早くもこれをカキツバタであると信じた。そしてこの古い考定が今日まで続いて残り、俳人、歌人の間にはそれが頭にこびり付いて容易にその非を改むることができず、したがって俳聖、歌聖と仰がれる人でもみなこの誤りをあえてしているから、今日の人々の作り出す新句新歌のうえにもやはり旧慣に捉われひんぴんとしてこの墨守せられた誤りの字面が使われていて、すなわちこれらの人々には草や木の名の素養がまったく欠けていることを暴露しているのは残念である。私はこのような文学の方面でもその間違いはどしどし改めていくことに勇敢でありたいと思つている。今日、日進の教育と逆行するのは決してよいことではあるまい。

全体わが邦で昔だれが杜若をカキツバタだと言いはじめたかという、今から九百余年前に丹波康頼の撰んだ『本草類編』であろうと思う。そして同書にはまた、蠶実をもカキツバタとなしてある。次に『下学集』にも杜若がカキツバタとなっている。これで見るとカキツバタを杜若であるとしたのはなかなか古いことである。

この杜若なる漢名を用いたのが長い年の間続いたが、今から二百三十四年前の寛永六年

にいたつて、貝原益軒はその著『大和本草』でカキツバタが杜若であるという昔からの古説を否定し、あわせてその杜若は筑前方言のヤブミヨウガ（ツユクサ科のヤブミヨウガではない）すなわちハナミヨウガ（シヨウガ科）であると考定して発表した。

次いで稻生若水、小野蘭山などの学者が出て、今度は杜若はカキツバタでもまたハナミヨウガでもなくこれはヤブミヨウガ（ツユクサ科）であらねばならぬとの新説を立てた。

そして右はこれら景仰せられた一流学者のしたことでもあるので、その後多くの学者はみなきゆうぜん翁 然としてその説に雷同し、杜若はヤブミヨウガであるとしてあえてこれを疑うものはほとんどなかった。

しかるにその後岩崎灌園がその著『本草図譜』で右先輩の説をくつがえし、この杜若なる植物はアオノクマタケラン（シヨウガ科に属し支那と日本とに産し暖地に見る）であるとの創見の説を建てたが、これはけだし一番穩当な見方である。すなわち杜若はかくアオノクマタケランだとするのがまず間違いのない鑑定だと信じてよろしい。

これによつてこれをみれば、杜若をシヨウガ科のハナミヨウガに当てた貝原益軒の意見は、それは当たらずといえども遠からざる説ではあれど、しかし益軒の卓見がうかがい知られる。なんとならばこれは杜若を同じシヨウガ科のアオノクマタケランに当てた正説に

最も近く、これをかのカキツバタだのヤブミヨウガ（ツユクサ科の）だのに当てた説に比ぶればずっとその洞察が優れているからである。

サテ、杜若をカキツバタではないと一蹴したわが邦の諸学者、それは稻生若水、小野蘭山等を初めとして今日だれでもみな燕子花をカキツバタだととなえ納まりこんで涼しい顔をしているが、私はこれらの人たちのなんの苦もないようなお顔を拝見すると思わずハハハハと笑いたくなる。そしてその誤りを負い込んでもいっこうにそれに目ざめない不覚をあわれに感ずる。なんとならばカキツバタは断じて燕子花ではないからである。しからばすなわち世間一般の衆にそむいて、かくそれを否定する根拠がどこにあるのかと尋問せらるれば、すなわち私は躊躇なくただちにそれはここにあると即答する。すなわち今次にこれを述べてみよう。

カキツバタでは決してないぞとすべからく断定すべき燕子花の名は、元来宋の時代の朱輔（桐郷の人で字は季公）という人の著わした『淫蛮叢笑』と題する書物に出ている、その文は

紫花にして全く燕子に類し藤に生ず一枝に数葩（漢文）

ですこぶる簡単しごくなものである。が、しかしその性状はまことによく言い尽している。そしてこの燕子花には紫燕ならびに煙蘭という別名がある。

今ここに上の『溪蛮叢笑』の文とカキツバタの形状とを対照してみると、その間に截然たる相違点があつて、その燕子花が決してカキツバタにあたつていないことがただちに看取せられる。このことは今から二百十五年前の享保十三年に『本草綱目補物品目録』（出版は宝暦二年）で、初めて後藤 春が『溪蛮叢笑』に載っている燕子花は藤生でカキツバタには合わぬと喝破し、また畔田翠山もかれの『古名録』で同様な意見を述べ、ともにカキツバタを燕子花とする説を否定している。しかるに他の諸学者連はこの慧眼なる二学者の警鐘に耳をおおいあえてその誤りを覚らないのは憫然びんぜんのいたりである。

カキツバタの花はその花形決して燕には類してはいない。しかしこれを燕子花だと信じている学者の中には、なるべくその花を燕に連絡さすように工夫し、「花は夏の頃さきて、そのはなびらの、ながくなびきて、しなやかなること、燕の尾に似たり」と書いたものなどがある。元来燕の姿は前方に一つの頭があり、その体軀の左右には翹翼があり、後方には両岐せる一つの尾があつて、いわゆる左右相称の偏形を呈しているから、それが斉整均

等なる輻射相称の形を呈せるカキツバタの花容とはいっこうに合致しない。次に「藤に生ず」とあるが、これは痩せて長いヒヨロヒヨロした茎、すなわち藤ツルのような茎に生じているとの意であるから、わがカキツバタのように茎がツンと一本立ちに突き立っているのは決して藤のような形容することはできない。次に「一枝に数葩」とあるこの数葩は数花の意であるから、一つの枝に四、五輪かないし七、八輪かの花が付いて咲いていなければ都合が悪いが、カキツバタの花はたとえその茎頂にある鞘苞中に二花ないし三花が含まれてはいるとしても、しかしその花は順を追って新陳代謝し一日に一花ずつしか咲かないから、それは決して数葩すなわち数花が開くとは言えないのである。

上のように燕子花を捕えそれが断じてカキツバタその物ではないと宣告しきると、しかばその燕子花とはいかなる正体の草であるかの問題に逢着する。すなわちこれはすこぶる興味しんしんたる裁判であるといえる。

私はわが独自の見解に基づきこの燕子花、それはかの『溪蛮叢笑』の燕子花をもって、キツネノボタン科に属する飛燕草属の一種なる *Delphinium grandiflorum* L. var. *chinense* Fisch. であると断定して疑わない。この種は支那の北地ならびに満洲にも野生してふつうに見られ、秋に美花をひらいて野外を裝飾する。今その草の状を見ると『溪蛮叢笑』の文と

ピッタリ吻合する。たとえその書の文が短くても、これを翫読してみるとそこにその要点が微妙に捕捉せられているのが認められる。和名をオオヒエンソウと称する。

上のごとくカキツバタが燕子花ではないとすると、しからば同草の漢名はなんであるかということになるが、私は寡聞にしてまだカキツバタの正しい漢名を知らない。カキツバタは北支那にもあるからきつとなにかその名がなくてはかなわぬが、今はそれが判らない。しかし待つていれば早晚明らかになる時期がいたるであらう。

右のように従来わが邦で用いられている漢名には、その適用を誤っているものがすぶる多い。かのケヤキに櫟の字を用い、アジサイに紫陽花を用い、ジャガイモに馬鈴薯を用い、フキに歎冬あるいは蕨を用い、ワサビに山茱菜を用い、カシに榲を用い、ヒサカキにを用い、シヨウブに菖蒲を用い、オリブに橄欖を用い、レンギョウに連翹を用い、スギに杉を用うるなど、その誤用の文字じつに枚挙するにいとまがない。この悪習慣が一流の学者にまで浸潤し、どれほど世人を誤つていて事体を複雑に導いているか、じつにはかり知るべからずである。こんなわけであるから古典学者などは別として普通一般の人々は、植物の名はいっさい仮名で書けばそれでよいのである。なにも日本の名を呼ぶのにわざわざ他国の文字をかり用いる必要は決してないと私は深く信じている。そしてこれは明治二

十年以来の私の主張であるのである。

青空文庫情報

底本：「花の名随筆の 六月の花」作品社

1999（平成11）年5月10日初版第1刷発行

底本の親本：「牧野富太郎選集 第二巻」東京美術

1970（昭和45）年5月発行

入力：門田裕志

校正：川山隆

2007年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

カキツバタ一家言

牧野富太郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>